

はれる、二十里堡、三十里堡、二家子、三家子
八家子などいふ地名は交通路の上に出來た聚落
であり鄭家屯、萬家屯、王大人屯、徐家房子な
どいふのは、さうした姓をもつ移民の開拓の跡
であり、田水井、七水井、大窪などいふのはや

伊太利とこころぐ (九)

瀧川規一

はり飲料水が決定した聚落であることを語るの
ではなからうか、一枚の地圖についてその地名
の起源をそれ自身の名から考へるのも面白い試
であると信じる。(藤田)

【ゼノア雜感】 既述の如く東洋人の吾々には
不必要なるアメリカ發見者コロンバスの家を見、
カンボ・サントの墓地で伊太利の愛國者マチニの
墓前に額づき、墓域内にある數多の彫像のエロ姿
グロ姿の説明を面白かしく案内人から聞き、
ラヌンチアタ (Lannunziata) の寺院内の天井の繪、
壁の繪が美麗なるに讚嘆した。それもその筈で
ある。院内をいくつにも區劃した側壁の禮拜所の
正面の聖畫は十七世紀のゼノア畫派の代表的な
ものであるからである。繪に

あるマドンナの美しき印象が未だ消えやらぬ
ちに、日本婦人かと思へるやうな年増の肥大し
た二人の婦人を見た。篤と見ると二人共上ひげ
を黒々と生やしてゐる伊國婦人である。これを見
て日本婦人にも口ひげがあるかどうか今日まで
迂濶であつて他人の顔をよく見て置かなかつ
た。歸國の曉には必ず見てやらうとさへ思つた
程に、マドンナとの對照の餘りに顯著なのに驚
いた。寺院 (Duomo) の横薄暗き處に佇んで行
手の地圖を擴げて居ると一人の娘が詞柔かに呼

ひかけた。これは街の女であつた。ムソリニの強制政策が漸く顯著に目立つて、銃劍いかめしき憲兵と羽帽綠衣短劍のフ黨青年が街路を横行するゼノアの町にも街の女が寺院の陰に秘むかと思つてこれ亦驚の種であつた。彼女は今印象を新にしたマドンナ程の美しさでなかつたので幸に魔の誘ひを受けなかつた。

宿にかへり食卓に就くと支那人が居ると聲高らかに呼ばはつて余輩を避けて食堂の彼方に席を占めた米婦人があつた。これ程に人種の蔑視をなす可き理由がどこにあるかと癪にさへて居たが、ゼノアから乗つた列車食堂内では、まだ酷い目にあつた。四人の米國婦人と女軍の長たるらしく見える一人の男が居た。一人の婦人は『私はアイスクリームが好きだ』と云つた他の一人の婦人は『私はライスクリームは大嫌ひだ』と云つて合槌を打つた。三番目の女は、『私が憎むものはライスクリームだ』と云ふ。四番目の女は『向ふにライスクリームのハリキリ(腹切のこと)が居る』と合槌を打つ。斯く云

つて四人共余輩の顔を見る。男は最後に余の顔をじつと眺め込むこと暫時にして『彼はハリキリのベリベリ(脚氣病のこと)だ』と云つて一同はどつて笑ひ出しては余輩の顔を眺め、眺めてはまたもどつと吹き出す。余輩も彼等のするが如くアイスクリーム一杯を注文する。一杯三リラ半である。生憎小錢をもつて居ないので十リラを出し釣りをと請求した。給仕男は『ノーグラチエ(いや有難う)』と云つたのみで釣錢を渡さずその足で件の米婦人の處に行き、共々に、『ハリキリ、ライスクリーム、ベリベリ』を運發して洪笑してゐる。仕方がないから立ち上ると、一同は『脊の高いジャップ、ライスクリーム』だと云ふと給仕男は『一人旅をやつてゐるからあれはスバイだらう』と云つて居る。言葉が判る丈け不快でもあり米人の憎さに驚いた。この話を歸國後會遊の經驗をもつ邦人に話すと甚平然たるもので『日本人のもてるのは淫賣か若くは安宿位のものだ。それでも誰でも歐米に行けるやうになつたのが日本の偉くなつた証據

だ。白人と對等でなどと考へるのが未だ早計だ』と教へて呉れた『同額の金を投ずれば有色人種は白人と同じ對遇を受けるものだと思ふのが間違ひだ』とたしなめられた。眇たる一介の人間が海外にて受けた惡印象によつて直に世界の強大國を咒つて居たことが愚でもあり神經過敏となつてゐた證據でもあるかと思ふとその淺慮に驚くのであるが、矢張り不快なことは不快であつた。

一日市中をあてもなく歩き廻つた。豫ねて紹介されてゐた商會に行つて、英人に面會した。この英人は甚親切であり人柄のよささうな中年の紳士である。ゼノアで見物す可き場處を教へて呉れたり伊人に對する時の細々した注意までも教へて呉れた。話に興が湧き遂に英人には珍らしく身の上話までもする。生來學問が好きであつたので大學を卒業して後學位をとる豫定であつたのが一身の都合上遂に果さず今では會社の書記になつてゐる。學問好きが會社員として全く無用なことであると云つて撫然とし感慨無

量な面持ちを見せる。同じく異郷にあつて異人からこんな話をきかされることの思ひがけないことに驚いた。

ゼノアの海の岬である懸崖に行く。地中海の水の色は鹽の含有量が多く爲めに海水の色は鈍灰色であると誰か先輩の波歐者が教へて呉れた。岩壁に立つて來し方の船路を忍び幾千里の彼方故郷の濱と相連る海面を眺めて居ると矢張り故國の海の色と同じ色をなし、波面に擡頭する岩礁にあたつて碎ける波は白い。途中で買つた新聞を讀むとはなしに岩壁に腰を卸ろして眺めてゐると、不圖紙面の記事に氣がついたのは時しも支那にて戰雲濃密であると報導である。歐洲の天地は既に戰亂鎮あり干戈納つてゐるに相も變らず東洋の一角では戰禍を續けてゐる。邦家としては白人に乘ず可き機會を與へ、個人としては白人に侮蔑の機會を與へてゐることの愚なるを思ひ所詮甲斐なき感慨に沈んだのは矢張り異國の旅に有勝ちの神經衰弱であつたか。大學に行つて玄關子に繪葉書を購ひ、案内を

求め構内一巡を依頼し階段を登り將に教室らしきものに近づくと一紳士が突然姿を現はし大聲叱呼した。その意味が判らなかつたが、恐れ驚いて急足に階級を下り町角に出ると豈らんや、とある一見見苦しき小さき家で一婦人が泣き聲を立てて居る。男が婦人を擲つて居る。異國では見ること甚稀なる夫婦喧嘩であるのが判つた彼等の喚く伊語の少しばかりでも判り得るかと思つて佇んで耳を傾けてゐると今まで婦人を擲つて居た男が突に戸外に現はれ出で、今度は自分に向つて拳を振上げた。これはたまらぬと思つて重い足を無暗に急がせて其處を立ち去る。非常に見晴しよく鉢植えの大棕櫚竹、蘇鐵、檜欖樹及び大理石の圓柱の列の間から海を下瞰し宮殿らしくもあり博物館らしくもある廣壯なる建物の内に足を踏み入れベンチに腰を卸ろしてゐるとまたも大叱呼された。ゼノアに於けるこの驚の連続は今日も猶不思議なる驚異として印象に深い。

愈ゼノアを去る前晚のことである。時は既に

八月のことであるに俄に夜間に冷氣を覺え爲に熟睡が出来ない。ネルの下着を靴から出し漸く寒さを凌いだ。翌朝荷造りの際鞆の中に納まらない。ゼノアに到着した際には驛で赤帽にポチを取られ、驛から宿までホテルの荷運びにポチをとられホテルの玄關から室までエレヴェータで運んで呉れた男にポチをとられ、且つはエレヴェータ係の男までポチを要求した。宿を去る時にはこの同じことを再び繰り返してポチの連發をやつた。英語ではポチのことをチップと云ふ。指先程の僅少な心づけの意味であるのが度重なると僅少ではなくなつた。これも亦ゼノアで得た驚きの經驗の一つである。

列車内で偶只一人米人紳士が居つた。中々柔和である。三四人同行する彼等とは全く異つて國籍を異にするかと思へる程に静かでおとなしい。米人の在來の印象を全く覆したのも亦ゼノアの最後の印象であつた。

【羅馬入り】海岸線を走る列車は一方に伊太利の中央を縦走する山脈、エトラスカン族の住

居する圓錐形の山嶺の町などを遠くに眺め一方に地中海を眺めつゝ、旅客に飽きを知らしめぬうちに羅馬に近づいた。巴里で買った寫眞機が珍らしさに車窓から或は山或は海を撮影してゐるとフアシモの青年が來り折角寫したフィルムのみならず瑞西でとつたフィルムまでも沒收して了つた。羅馬に到着した時に警察へちよつと來いの憂目を見ることかと心配してゐたがそのことがなくすんだ。恐らく拙な撮影の爲めに現像して見ても何も寫つて居なかつたのであらう。驛に着くと澤山な客引が居る。日本のどこかの遊覽地のそれに似てゐる。聲を高く客を呼び旅客に不快な感じを與へる點は酷似してゐる。どろどろに汚れた洋服を着、うるさい程つき纏ふ。ホテルに客を運ぶ自動車に黒帽、黒服の大男が泰然と車内に構へて居る。二人位坐れる筈なのが、餘りの大男に場塞ぎをされて坐れない。他のタキシで行くことに定めた迄はよかつたが、遂にタキシ男にしてやられ、勝手不紊内の土地で遠方まで運ばれたことは既に述べた。や

伊太利とてころぐ

がて辿り着いたホテルの玄關では一人の若い男が居る。流暢な米語を繰る。この頃は旅馴れて居るので宿に着けば必ず帳場で室料を聞きたくし自己の懐と相談の上費用に耐えずんば安き部屋を求める。うつかり聞かずに部屋に案内されると米國では目玉をむく程の高價な部屋であり支拂の際後悔しても追付かぬ。伊國では玄關子が非常に調子よく愛措がよい。帳場で部屋代を聞きたくす餘裕を客に與へぬ程に調子がよく有無を云はせず部屋に案内する。案の定伊國としては料金が高い。日本流にどこかよささうな部屋に案内せよなどとお大名式に出ると、歐米各國何れに於ても大變なことを仕出かす。宿の帳場で室代の談判などをやつてゐる邦人を見て、人格下劣なりなどと評する同胞人がありとするならば、その人は未だ旅馴れぬ人か然らずんば徒に高價な代を拂ふことをもつて人格高しと思つてゐる人である。

食堂に入つた。給仕頭が日本人の仕草を眞似る積りか邦人が貴人を迎へる時になすやうに中

腰に身を屈め頭を低く垂れ兩手を膝について慙懃に食卓に案内する。抑も白人は何人に挨拶をする時でも決して腰を枉げない。帽子を脱いで

も下にとらず上にとる。日本人は三重の仕草をする。第一に帽子を下にとつて、頭を低くし、中腰になる。而かもその上に挨拶の言辭をながたらしく云ふ。腰を餘りに屈める爲めに相手の云ふ詞が不明瞭になることすらある。大抵は推量して違はぬ月並の挨拶であるからよいもの少しでも重要な用件はこんな風にしては云ひ得ない。それが殊に婦人に多い。若し今日の邦人婦人の如くアツバツバを着るか又はスカートの短いのを着て、在來の如く中腰低く屈めやうものならば大變だ。第三者にお譬の公開となる。該は本筋をそれたやうではあるが、中腰にならぬ白人國にあつて而かも日本人のみに向つてそれをやられると、如何にホテル内であらうともちやんちやらおかしな氣まりの悪い感じがする。満堂の米客が、怪訝な顔をして視線を向ける。くす／＼せせら笑の聲さへも此處彼處から聞え

る。暫くするとジャボ、チノ(日本人支那人)の聲が群客雑談のうちに交へられる。獨旅の心細さがこんなことにすら感ずる。

食事が終つて休憩室に來ると、帳場の男と給仕頭とが口早に頻に議論をし口角泡を飛ばさんばかりの有様である。時々帳場の男の口からジャボ／＼の語が出る。餘り早過ぎて何を議論して居たのか薩張り判らない。自分の顔を見ると、直ぐに議論を止めた。玄關番と談話を交してゐると、件の帳場男が顔面に怒を含み玄關子に向つてバ、バトロネと怒鳴つた。日本人を鼠負にするなどの意である。一喝喰つた玄關子は鐵砲玉の彈がれるやうに身を前庭に躍らし出で、庭前樹下の卓子に坐せる米人と話をしてゐる。前庭の樹間に自分も亦ブラ／＼出た。只獨り卓子によつて羅馬の地圖を擴げ翌日の行程を考へてゐる。部屋付のボーと女給とが來て『あなたは氣の毒だ。米客の多い時には帳場は何時もあの通りである。あれは全く日本人嫌ひではないのだが米人の手前氣兼ねしてゐるのだ』と云つて

ゐると、またも帳場が来て『バルチ』と怒鳴つたので、二人は逃げるが如くに其場を去つた。

この一夜はホテルの夢圓かならずである。露天の芝居見物に出かけて居る夢を見た。前方に觀衆が進出し過ぎて居るので、現場係は車を馬にひかせて、その勢で觀客を後退せしめた。後詰の客は前列の客に同情したか將た危険を感じたのか全觀客總立ちとなつて折角の芝居が見物人なしに演じられた。妙な夢を見たものだ。醒むれば夢は現實の一部である。只同情して呉れる後詰の觀衆をもたぬ點が相異してゐる。今日まで幾多の書物によつて伊國の文物を夢見てゐた。然るに馬車の勢で後退を強ひられても只後列の客の悦ばすに止まる。その悲しき有様はこのホテルの對遇である。

同年五月頃には邦人のこのホテルに滞留するもの五六人もあつた。友人も二人あつた。生嚼りの伊國語の知識が禍して羅馬の第一印象は甚よくない。ホテル業者は一種の外交官なりとは

兼ねて英國で催された世界のホテル同業者の大會で聞いた言葉であつた。これ位の旅の哀は伊國にあつては口外するに足らぬ淺さであることを翌々日同じく薄遇をうけたらしいポーランドの飛行將校なりと自稱する男の話によつて知つた時は益前途を悲觀しなければならなくなつた。羅馬を去る日列車内で件のポーランド將校と口を揃えて車内の伊國紳士に訴へた。

新著紹介

○地質調査所報告 第一〇五號

東京地學協會發行 昭和五年一月 定價五五錢 商工省著作

昭和三年度に於ける事業報告で、末尾に七萬五千分一地圖幅功程圖を附す。昭和三年迄に出版済のものには銚子、筑波、銚子、相良、多治見、足助、豊橋、伊良湖岬、設樂、鳥羽、岡山、庄原、今治、久萬、田石山、徳山、室積、山口、小串の十九幅、調査済のものは小坂、熊谷、八王子、東京、静岡、*惠那山、野後、伏見、甲浦、*室戸、高知、*府中、尾道、松山、柳井津、*須佐、豆田。山鹿、鹿兒島、伊集院の二十幅である。因に*印を附したるものは昭和五年四月までに既出版され、其他天草も出版済、現今二四圖幅は出版されて